171
834

公平評論天理教大斷案

特18
270

自序

公平なる觀察は著述者に要するところ。予是に倣ふ。偏頗なる眼孔は記者の取るべからざるところ。予是に學ぶ。由來佛者に偏固の徒多し。天理教の書多く佛者の手に成る天理教に對する公平なる評論の出でざる。豈所由なしとせんや。不肖不揣。一枝の筆管。片々たる小文字。遂に集て「天理教大斷案」となる。豈此れ完美の域に達すと謂はんや。只其の缺を補ふに過ぎざるのみ。姑く記して序に代ふ。

明治廿九年八月　東都菱水閣の寓舍に於て

鐵腸識

凡例

一本書は自ら局外の地位に立て、公平に天理教を研究し公平に之を評論して斷案を下したるものなり。

一本書は天理教會秘藏の典籍に渉り、又自ら教會を實視し更に天理教に關する諸種の著述を參酌せり。

一本書は各章に分て教理、祭式、教祖、沿革の大要を序し、更に宗教の解釋、隆盛の原因を述べたれば、天理教の一班を知らんとするものにも便あるべし。

一本書殊に談話體を用ふ。蓋し演說者の參考に資せんが爲なり。

一本書の一半は余が編輯に從事せる明教新誌紙上に揭載せるもの、今增補訂正更に一半を加へて鉛塑に附せり。

一本書脫稿去る五月にあり、恰も三陸海嘯の變に際し、余又視察慰問の爲、此地方を巡廻して此書を忘る、刊行遷延今日に至れるもの卽是が爲なり。

一本書恐くは天理教に關する著述の最後の出板たらんか願くば讀者此書に依て天理教に關する公平なる判斷を下すの一助ともならは、豈獨り著者のよろこびのみならんや。

丙申八月

著者識

公平評論

天理教大斷案目次

第一章　緒言
第二章　宗教として天理教を觀察す
第三章　天理教々理を論ず
第四章　天理教祭式を論ず
第五章　天理教々祖を論ず
第六章　日本國民と天理教
第七章　佛基両教と天理教
第八章　天理教大斷案

公平評論

天理教大斷案

安藤鐵腸　述

第一章　緒言

「索隱行怪後世有述焉吾弗爲之」とは孔子聖人の言で御座りまする、此の意は今深く隱僻險險の理を索め考へて、奇怪の言を弄し神變の行を爲せば、能く世を欺き名を盜むに足り、其の時代の事理に晦き者共は、其說を聞て之に惑ふのみならず、更に其人の死後後世に至りて、段々之を布演し傳播するものが出來、遂に其の邪なる教は大に隆盛の運に向ふことがあろうけれども、是は不正なる行爲故、吾は決して此の如きことをせぬと云ふことで、則ち後世

の人を戒めた言でありまず、「有墮餓鬼中火焰從口出四向發大聲」是爲口過報。雖復多聞見。狂大衆說法。以不成信業。人皆不信受。若欲廣名聞。爲人所信受。是故當至誠。不應作綺語」とは大聖釋尊の御教で御座りまする、此の旨は他でもない已の名の爲め利の爲めにせんが爲に、種々巧に言を廻らして人を欺き、世を惑はすものは、其の罪に依りて餓鬼道に墮在して焔々たる炎を吐き、大聲を發して苦まねばならぬ、是れ決して他の爲せる災にあらずして皆自ら招く口過の罪である、復此の如く正義公道の操の無い人は多くの人の中に立ちて、教を說き法を演すると雖其目的人を欺くにありて、自已が信ずる眞實の信業なきが故に

心ある人は皆其の說く所を信仰しませぬ、其れ故に若し人が世の人々の爲に已の云ふ所を信受せられ廣く用ゐられんとせば、左樣な邪な心は拂ひ退けて、當に至誠の心にならねばならぬ、誠のあるところには人擧て歸仰するがゆゑに、決して言語の上ばかりを飾り立て、巧みに人を惑はす樣なことをしてはならぬと、同じく後世萬人を御諭しなされた御意でありまする、是れ釋尊の教と孔子の言とは、一寸見ると其間に相牴牾する所がある樣に考へられますが、能く能く考へて見るとそうではない、孔子のは言を巧にし行を奇怪にすれば、今の人も後の世の人も、其れに惑ふものがあるけれども、それは不正の欲望であつ

て、成る程一時は世人の趣好に投じて盛んにならんかなれども、いつまでも連續して我は眞理なりと意張りてお譯にはいかぬと云ふ事で、此の意味を裏面に含んでおります、又釋尊の御教に「以不成信業人皆不信受」とあるは目前一人も信用するものがないと云ふのではなく、隨分事理に晦く、正道に疎きものや、或は非望の欲望を滿足せんと欲するものは惑ふて信ずるであろう、併し有識有眼の人士、何人かゝる虛妄の理に惑はされん、化の皮は次第に剝かれて仕舞ふと云ふ意味でありますれば、兩者少しも相牴牾するの憂はない、只孔子は之を表より云ひ、釋尊は之を裏より觀したるの相違で、物は凡て見る人の見

處に依て違つて見へる、一枚の碁盤でも表には三百六十五と奇麗巧に飾りてあれども、一度其裏を返して御覽なさい縱線もなければ横線もない、只一枚の木片に過ぎない、今も此の道理に違いはありません、つまり勸めるところは一つでありますが、御互にどうぞ此の懇ろなる御教誡を心に體して、虛そ僞りのなき正義公道をたどりて、社會に生息したいもので御座ります、併し斯樣な御誡めは成る可く應用の場合がない方が善いので、果してそうなれば釋尊も孔子も、如何計り御喜び か知れませぬ、然るに今や悲しくも、私をして此の御言を應用するの煩る必要あるを感じ、拙辨を弄して破邪の鐵

鎚を振はねばならぬ場合に立ち至りたと云ふのは誠に歎きても尚餘りある次第で御座ります。

諸君は既に新聞の上で御承知の事と存じます、去る三月九日より十一日に至るの三日間、此頃下等社會に流行する、天理教の教祖の十年祭を大和國山邊郡三島村なる天理教本部に於て行ひました、處が其の信者の東より西より南より北より、雲霞の如く此の地に蝟集し來るもの、實に二十五萬人の多きに達しました、其前日法隆寺驛にて滊車を下りたるもののみにても、一萬九千八百二十二名ありたと申すことであります、なんと諸君熾なるものではあり、ませぬか、諸君は之を見之を聞て何と御考へで御

座りますか、蛆蚰の輩語るに足らずとして冷笑一番の下に附して宜しきことでありませうか、長堤も蟻蠔の穴より崩る、平素は蟻の穴の如き小さきものは、我々は何んとも思ふておりません、併し油斷は大敵です、奚んぞ知らん十里の長堤も僅々此の一小蟻穴より、遂に崩れかゝる不幸に接せんとは、是れ余輩の不肖を顧みず、諸君に前に妖教天理教を擔き出して、頭から尻から、手から足から、顔から腹から、諸方から觀て、粉な微塵に之をくだき終らんとするのであります、血あり、涙あり、義あり、仁あるの諸君よ、冀くは退屈を忍んで、此から私の述へ立つるところを御聽き下さい。

第二章　宗教として天理教を觀察す

今や天理教を論ずるに當りて、一應彼の說く所を畧陳するを便宜と考へる、最も委しきことは次の章にて御話申す積りなるも、今宗教として觀察するに、其の大體がわからなくては不便なる故、其の開教、沿革、教義の一通りを御取次に及ぼうと思ふ

先づ初に天理教は神道十一教派の中、何れの教派に屬して居るか、所謂單に神道と稱する本家本元の所屬である開教はいつの比にありて、存ずるか、實に去る明治二十一年の四月にして教祖中山ミキの孫なる奈良縣平民中山新次郎が神道事務局總裁子爵稻葉正邦氏の認許を得、此、

に初めて教を開きたのである、其れより僅々十年の間に於て、如何に愚民計りの集り合ひとは云へ、今日の如く各地方に盛に行はるゝに至りたるも、其の沿革を述べんに最初中山新次郎が天理教會開立の認許を得ざる前十數年其の自家の住村なる大和國山邊郡三嶋村に於て布教を試みしに、人擧て之を聽き、段々信者の殖へる模樣あり且つ信者の熱心なる、教會費、基本金、其地一切の事に於て能く支出の負擔に堪へ得るの見込あるに依り、新次郎は即神道事務局に願出して、二十一年の四月と云ふに初て開教の認可を得た、是より新次郎は自ら天理教會長となり、舊修驗者、山伏等を驅り集めて教師と爲し、之を同國郡

山、京都、大坂、神戸、龜山、名古屋、長良等の諸方に派遣して以て一齊に布教せしめたるに頗る好成績を得た、更に教域を擴張して有緣の國々に布教せしに孰れも盛かんに弘まりた、そこで本部を大和國山邊郡三嶋村五番地の自宅に設けて、こゝに巍然たる殿堂を建築し、全國信仰の中心となした、近國遠國より杖を曳き笠を被りて參詣するもの引きも切らぬ有樣となるに從て、其の門前には旅舍、茶店、飲食店等の設けが出來、非常に賑かなる景況となりた彼は是に飽き足らず、尙全國に及して廣く信者を募らんと計畫し、所々に教會所を建て又「道の友」と云ふ機關雜誌を發行し、更に大會堂を東都の中央なる神田錦町の大街

道に建設せんと目下其の工事中である、是れが天理教十年間の略歷史であるが、なんと諸君、たゞに理論の上のみでは爭はれぬものではありませぬか、こゝ一番の御注意を願いたい、次に教理のあらましを論じませう。

苟くも宗教の成立するには其の宗義教理がなくてはならぬ、かゝる孟浪荒誕なる宗教でも、多少說く所はある、彼は如何に其の教義を說き明すか、彼曰く從來の神道では天神地祇八百萬神と云ひて、餘り多數で繁雜でならぬ、然るに教祖の身に乘り移つられたる十柱の神、卽國常立命(月の神)面足命、國挾槌命、月讀命、雲夜見命、惶皇根命(日の神)大釋天命、大房邊命、伊弉諾命、伊弉冊命を總合して天理王

命と云ひ此の天理王命は嘗て無かりし世界、無かりし人間を造りたる即創造神なり、此の天理王命は太古より今日に至る迄天地萬有を經緯扶持せし全智全能の神なり、此の故に若し人此の神に事ふることと足らざれば、不慮の災害に苦しめられ、此の神に事ふる事厚ければ、其の冥助に依て幾多の幸福を亨受することを得るのである、此れ即彼れが據て賴むところの根本教義である、即淺薄なる彼等の世界觀である、彼れは此の如く積極的に天理王命を說明すると共に、消極的に人間自らに就て、其の不完全を說明する不完全とは何である、八つの埃である、八つの埃とは、何である、「惜い」「欲い」「可愛い」「憎い」「慾」「高慢」「怨」「腹

立」の八慾情である、是れ人として無きこと能はざる慾情で或は是を八塵とも云ふ、是れ人間の心得違にして即神意に契はざるものなり、此の八つの埃を拂はざれば神の御助けは無きものである、此の八塵を拂い退ければ、元來人の心は正しきものなるが故に本來の性德に歸り神の御助けを蒙むるのである、此れ彼れが劣等なる人生觀である、以上彼等の所謂教理の大體であるが、尙ほ彼等は此の如きことを云ふ、月は國常立尊にて其の體わ一頭一尾の大龍である、日は面足尊にて其の體は十二頭三尾三劔の大蛇である、此の月日の二神が他の八神の體なる人魚白蛇、鯱、龜、鰻、鰈、黑蛇、河豚を材料として人間の肉體を造り

鎔を以て人間の心魂と定められたされば此の月日の二神は造化の元神にして、他の八神は肉體の基本である、故に我々は凡ての拔苦與樂を此神に向て願ふものである此の故に天理は神の法にして學問や理窟で知らるゝものでない、夫の醫藥の如きは學理に徵したものである、智識に依りたものである、智識には限りがある、學問には際めがある、故に醫藥等には効驗に限りあるも、智識學問の外にある天理は凡てに於て限がない、故に病氣、災害、出産貧困、其他吉凶禍福の祈禱凡て此の身心造化無限天理の神に向てすれば其の靈驗極りなき譯であると先づ大概上の如きものである、かくの如き荒唐不稽の頑說を弄し

て愚民を籠絡する實に玉石混淆の歎あらざるものはありますまい。

元來宗教と云ふものは如何なるものである、宗教之を原語にてReligionと云ふ其の元如何なる字義を含むか學者の說多數にして明でない、今其の眞に近きと思ふ說に依れば、このReligionなる語は、もと羅甸語のReligioより來りしものである、此の又Religioの起りに就ては、學說紛々として一朝に分けがたいが、羅馬のシセローと云ふ學者の說に依れば、Re-legereと云ふ字より來りたるものである、即ち英語にてTo gather up again若くはTo conciderの意である、依て注意、尊敬等の意味も之より出で來た

るものであるとするのである、又或一説では To ponder 即緊着の義であるとするのもある、私は寧ろシセローの説が眞に近かろうと思ふ、此くの如く解釋すれば、信仰の意も崇敬の心も自ら其の中に籠ることゝなる、此の義に基いたる宗教と云ふものゝ解釋も、又多樣にして一朝一夕には辨ぜられぬが、私は其の中シユライエルマーヘル氏の説とヘーゲル氏の説を取る、シユライエルマーヘル氏は曰く、宗教とは吾人が或る體の上に絶對的に依憑することから成り立つ、其れ故に絶對的依憑の識覺即宗教であると、ヘーゲル氏は曰く、宗教の成り立つは依憑と云はんよりは却て自由の思想と云ふべきである、所謂宗教は神

的精神を有限的精神の中から開發するものであると、一寸見ると、一は或者に絶對的に依倚し憑賴すると云ひ、一は自由の思想を開發すると云ふにあるが故に、両者相衝突するが如く考へらるゝも、そうでない、私は寧ろ此両氏の説相待て始て完全に宗教と云ふことが解釋せらるであろうと考へる、別の言で云へば、シユライエルマーヘル氏のは、此の世界の事々物々は凡て有限である、然るに其の實體に立ち入りて論ずるときは、此の有限の事物を總括支配するところの無限獨立の一體がある、吾人の心中には之に依憑することゝの一種の感覺がある、其の感覺即宗教であると云ふの意で、ヘーゲル氏のは吾人の精神

は表面は有限の一作用に過ぎざるも、其の裏面に入るときは理想と相通じて一體なるがゆへに、吾人は有限の心中に自由に無限の理想を開發して、段々完全なる自由を得るに至る、其の自由の思想が即宗教であると云ふのである、然らば両氏共に此世界は相對不自由の世界なれば我々は自由の思想を以て無限の理想と融通し、其の無限の一體に依憑するところの思想が即宗教であると云ふことに結歸するのである、是れが最も好く宗教と云ふことを穿て居ると思ふ、更に私は此の説に基て別の平易なる言を以て言ひ顯はさうと思ふ、宗教とは何であるか、宗信憑依(一)、心情滿足(二)、道義實行(三)、此の三點を完全に有す

るものである、絶對獨立の一體に向て之に憑依するものは即崇信憑依である、完全に憑依が出來れば有限の精神は無限の理想と融通する之れが心情滿足である、既に心情滿足して愉々快々心を安んぜし上には、其の内界精神の有樣を外界社會の上に開き顯はし、百般の宗教的事業を起す、之れ即道義實行である、更に詳く云へば或は偶像を信じ、或は佛を信じ、或は天帝を信じ、或は妙理を信じ、或は自心即佛を信ずるのは崇信憑依である、其の信仰の結果精神の歸着を定め安心立命を得て、光風霽月の感ある心情滿足である、或は寺院を設置し、或は教會を組織し或ば神佛を安置し、或は在教を試むるは取りも直さず道

義實行である。

此より見れば元來宗教と云ふものは主觀的のもので、客觀的のものでない、言を換ふれば自心精神の作用にして外界別在のものでない、シユライエルマーヘルの絶對的憑依說にヘーゲルの自由思想說も皆內界自覺の作用に過ぎない、獨立無限の一體に憑依信仰するは無論精神の働にて、自由に理想と融通するも又心內の活働である、崇信憑依、心情滿足、つまり心で信じ心で賴み、心で喜び心で滿足するのである、然らば宗教と云ふものは全然主觀的內界的の自心心內の作用と私は斷言致します。

其の心で賴み心で求め心で安んじ心で滿足する即自覺

の精神的主觀作用を完全に組立て一の形式として顯はしたのが即ち佛教なり基督教なりの宗教である、さて其の形式が立て見れば、客觀的に之を行ひ之を弘める方法が必要となる、是れ即道義實行である。

開けば五指、合すれば一拳、分けて見れば此くの如くなるも、結局安心立命と云ふ一つに歸着する、自ら世界及吾人の有限、不完全なるを感じて向上して無限絶對の一體を認め、之に向て憑依し、信仰し、其の結果理想と相和し相通じ、こゝに金剛堅固の眞心を決定し、安心立命、風は吹けども山は動ぜぬ底の覺悟になるが、是れ即宗教と云ふものである、私は先づ宗教と云ふものを此くの如くに考へて

居る、餘り複雜になりましたからこゝに圖表を致します

宗教
- 絶對的憑依（シュライエルマヘール）――崇信憑依
- 自由思想（ヘーゲル）――心情滿足
- 道義實行――客觀的

（主觀的）

安心立命――組織的宗教

宗教と云ふことの解釋は略前述べた通りである、宗教と云ふものは既に此の通りと定まりた上は、此の解釋に外づれたものは宗教と命名することは出來ない、今や全國に翼を伸さんとしつゝある天理教は、果して此の宗教の本性を持して居るものであろうか、果して立派なる堂々たる宗教と名くることが出來やうか、こは一問題である宗教の本性がわかりたれば、是の鏡に照して天理教の姿

を寫すのは順序である、今迄或は演說に、或は討論に、或は著書に、或は雜誌に、天理教を抗擊したるものは頗る多い然し私の見る所にては、此等多くの論者は何でもかでも彼を撲滅せやうと云う考が先に立て居て、彼等の所說を研究して而して後に破らねばならぬものなら破ると云ふ考へがない、故に其の說くところ論ずるところ多く公平を缺て居るやうに見へる、理は理、弊は弊、弊を破らんとして理を無視すると云ふは大丈夫たるものゝ爲すべき事でない、基督教が我國體に合せぬからと云つて、彼は眞理でないと云ふ事は出來ぬ、そこで私の考へには理として取るべきところは取り、弊として捨つべき所は捨て、其

の上にてかゝる宗教が今日の我邦社會に必要であるか將た有害であるかと云ふ斷案を下すの至當であろうと思ふ。

私は斷言する、天理教は宗教の性質を具備して居る、彼の人生觀たる八つの埃は、其の說の卑近笑ふ可きことこそあれ、明かに人生の有限不完全なるを觀じて居る、彼は八塵を說て曰く、是れ人として無きこと能はざるの慾情、人元來の心得違にして神意に契はざるものなりと、卽人生果敢なき不自由の境界なるを觀じて、人此の八塵を拂はざれば神の御助を蒙らざるものとする、如此己の有限不完全を認めて、さて十柱の神卽天理王命は世界人類を創造し、太古より今日迄天地萬有を支配し、全智全能の神なる故に、我々は此の天理王命にすがりて御助を蒙るべきであると、十柱の神卽天理王命を以て有限なる此世界此人類を總括支配するところの無限完全自由獨立の神とし、我々は此の天理王命に憑依し之を信仰すべきであるとする、こゝに於て彼は又明に無限獨立の絕對を認めて居る、既に之を認め之を自覺す、此の神に憑依して幾多の幸福を得んと宗教的の願望を起しつゝあることも、又明である、彼は如此、たしかに崇信を有したしかに憑依を有す、宗教的要素の一をたしかに備て居る、而して彼は此の八塵を拂ひ退ければ、元來人の心は、正しきものなるゆゑ

に、本然の性德に歸りて神の御助けを蒙むるのであると
する、即我々人類が心得違なる八塵を排除して自性清淨
なるところに、我々有限相對の心は、無限絶對なる十柱の
神即天理王命と相融和し、其の冥助に依て幾多の幸福を
享受するのであると堅く信じて疑はざれば、即心を安ん
じ信心を決定する、是れ即心情滿足の姿ではないか、こゝ
に於て彼はたしかに宗教的要素の第二を具へた、彼れが
教會を建て、教式を定め、祭典を行ひ、祈禱をする、是れ皆堅
く信じて心を安んじた、心情滿足から流れ出でたる所謂
道義實行ではないか、自ら人間の不足なる心得違なるを
觀じて天理王命に崇信憑依し、其の御助けに依て我々は

種々の災禍を免れ幾多の幸福を享くことの有難さ尊さ
よとの心情滿足から流れ出でゝ、此尊き御教を多くの人
にも知らせて一列の幸福を享けたいとの思より教式を
定めて來た、是れが道義の實行で即宗教的要素の第三で
ある、彼れは八つの埃を知りて天理王命を頼む主觀的思
想を具へ、客觀的に教式を組織したのである、されば彼等
は其の宗教の根本主義たる安心立命を決定して精神の
歸着を定めて居る、此くの如く推考するときはとにかく
天理教は宗教の要素を具備して居るものである、私は或
る論者の如く「これ所謂彼れが表面のみの教條にして內
心の夜叉を逞うせむが爲めの外面如菩薩なるを如何」と

云う如き言を弄し、教理と教弊とを混一して、布教者の不德惡行を以て、直に教理の善惡を云ふことは太だ好まぬところである。

若し其の弊害を以て之を國法上より論じ、社會の上より論じ、道德の上より論じて之れを有害であると云ふは素より其の處である、併るに一概に教弊を論じて教理の可否に及ぼすに至るときは今日の僧侶は多くは腐敗せるを以て、佛教の教理は眞理で無ひと云わねばならぬ樣になる、私は此の如き意見を以て居る、故に私は彼の所謂根本教義たる八つの埃と、十柱の神卽天理王命とに就ては不完全ながらも有限相對の人類社會を觀じて無限絶對

の神に融通する宗教の本義に叶て居ると斷言する、若し其れ十柱の神の配列、八つの埃の意味、及人類創造の說、天理神法の論等に至ては頑靈妄迷取るに足らぬものである、是は次章の教理を論ずるところに讓ります。

要するに天理教は宗教の性質を具へては居る、具へては居るが極て劣等なる野蠻時代の宗教である、野蠻時代でも、未開時代でも、將た文明開化の時代でも宗教の本性に至りては變りはない、只時代が進み人智が開ければ開けるに從て其の程度が進歩するのである、時代の文明野蠻の別あると同じく人心にも之の別がある、一班に云へば野蠻時代には人の精神は皆野蠻にして、文明時代には人

の精神も從て開けてくるは普通だが、一つ一つ別けて仔細に調ぶるときは、文明時代の人の宗教思想にも、又野蠻時代の考がある、天理教は即是である、文明時代に於ける野蠻時代の宗教思想の殘り物である、併し野蠻時代の宗教思想は宗教でないとは云へぬ、其の思想に優劣賢愚の別こそあれ、矢張り宗教には違ひない、天理教は即是である文明時代に於ける劣等頑愚の宗教思想である、果して然らば私は天理教は宗教なりと云ふことを斷言するに躊躇致しません。

吁、人文開明皇威八紘に振ふの今日の我邦に於て、かゝる野蠻なる、かゝる劣等なる宗教思想に沈湎し、かくの如き

淫猥なる、かくの如き淺薄なる宗教を要求する人の多きを見れば、我國人の宗教思想も又誠に幼稚なるものではありませぬか、實に歎かわしきことで御座ります。

第三章　天理教々理を論ず

天理教理の大體は、第二章宗教上より天理教を觀察すと云ふ題にて辨じた通りであるが、尚彼等の六箇三略として、信者の外には見せぬと云ふ「御傳へ話の覺書」及「神代の古記」なんど云ふものに依て見ると彼等の秘密にして居る奥の手がわかりて彼等の如何に沒理漢にして、取るに足らぬことが分かる、依て一層立入て其に就て御話に及びませう、さて人間の出來る其の大元はどうであるかと

云ふに、全體此世の本元は人間もなければ世界もなし、なんにもなひ泥海で、其の中に月日の両神が居られた、此の両神が珍寶なる人間と云ふものを拵へんと考へ出し、さて之を造るには其の種苗代がなくてはならぬ、そこであれこれと探し出し、遂に人間の如き顔を以て居る人魚と白蛇とを見出した、此の二つは心至て正直である、依て此の二つのものに其の事を云ひ含めて人間の種と苗代とに貰はんと相談せしに、両つのものは之を嫌ふてうけがはぬゆへ、人間が出來、世界が出來た其上は人間の親神として崇拝すると云て、無理に承知をさせて貰ひ請けたさては人間と云ふものの種苗代が出來たのであると云ふ

なんと諸君實に阿呆げたる馬鹿々々しき説明でありませぬか、萬有進化の説は聞て居るが人魚と白蛇とを口説て、嫌やがるやつを無理往生に承知させて人間の種と苗代にするとは開闢已來初めての創造説である、まづ第一に世界もなひと云ふに、泥海のあろふ筈はなひ、海とは世界の中の一つの現はれではないか、世界があればこそ、山もあり海もあり、草もあるなれ、木もあるなれ、無ひ世界に海があるとはさても不思議千萬なる議論、原因結果の理法は眞理であるが、これは又結果があつて後に原因が出來ると云ふ空前絶後の大議論である、又全知全能の神が人間を造ろうと思召したら、其の意思通りに必要なる材

料を勝手に求むべき筈、然るに左はなくて御鄭寧にも白蛇や人魚の下等動物の類に相談をし、其れまでも嫌はれて辭はられたとは餘り神に權利がなき過るではありませんが、荒唐不稽とも、妄誕虛搆とも云ひ樣がない、彼此云ふのも大人氣なき愚論であります。

それでとにかく人間の種は見付けたが種々道具が要るそこで泥海の中を見るに泥鰌計りがうごめいて居る、早速喰て其味と其の心とを見て、之を人間の靈魂としたとは彼れの信して疑はさるところ、若し唯物論者の說に從へば固より靈魂と云て、肉體と離れたる一種靈妙の作用はない、人間の所謂靈魂と稱するものは即ち人間の肉體

上に於ける生理的の作用である、然れは人間の體が出來上て、他の種々の作用が活動すると同時に所謂靈魂作用が起ることになる、殊更に人間を造らぬ前からぬらぬらすべり易ひ泥鰌をつかまへて靈魂とすると云ふ樣なことはなひ、更に唯心說を懷く人の見解によれば世界は心の變現である、人間となるも亦同じく靈魂が作り出したるものである、そうして見れば靈魂あつての人間、心あつての世界、人間の種を見付けて來て、さて靈魂は何にしようと云て探り當てる樣なそんな氣樂な沙汰ではない、天理教は唯心論が唯物論か隨分重寶な便利な、古今東西上下數千年間の哲人碩學も未だ考へ及はざる心物一切貫

受主義の上に建立された、今日の學理の眼では、到底見極めの付かぬ立派な御説であります。

さて種も苗代も出來た靈魂も出來た、之れからは人間の體を形造る必要の要素が要る、何にしようか、見渡せば戌亥の方にあたつて鯱鉾と云ふものが居る、喰て見て其の心と其の味とを見るに、いかにも勢強くして、シャッチョコバルが故に之を取て骨とし、男の道具に仕込み、又辰巳の方を見渡すに龜と云ふものが居る、是も同じく喰て心味を見るにいかにも、皮強くして容易に倒れぬものなるがゆへに、之を取て皮とし女の一の道具に仕込んだと説き濟して居る成る程骨はコッコッ、シャッチョコバリて

堅く皮は強くして柔かである、一應は何とでも愚民を籠絡する牽強附會の説は立つ、併し一一に隨分骨の折れた藝である、是れ等は實に齒牙にかくるも馬鹿らしい愚論ではあるが、假りに神が完全なる人間と云ふものを造ろふと思ふて所々色々のものより其の粹を拔き英を蒐め神の理想の上に人間と云ふ一個の、完全完美の標本を形造り之に從て之の通りに人間なるものを造らんとせしものとすれば、多少學理の園に遊んだものには容易に首肯は出來ねども、とにかく神が創造の意見と見て容る可きである、然るに彼は此世の本元は人間も無く世間も無く、泥海ばかりなりと明言したではないか、其れに戌亥の

方を見て鯱鉾を認めたとか、辰巳の方をふり返て龜の子にぶつつかつたとか、何にもない中にそんなものゝ自由にある筈はない、實に前後撞着、支離滅裂、見易き此れしきの道理を見貫くことが出來ぬとは、扨て扨て憐れなものである。

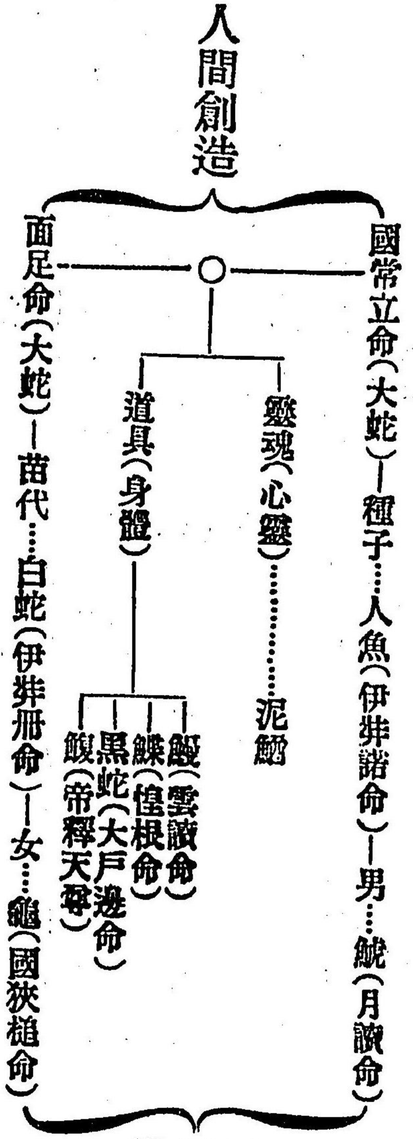
次に東の方に鰻を見て、自由に伸縮するものなるがゆへに、飲食出入の守護とし、未申の方に鰈を見て、身薄きものなるがゆへに、息風の守護とし、西の方に黑蛇を見て勢强く引ても切れぬものなるがゆへに、母の胎内より引き出す守護とし、丑寅の方に鰒を見て、大食するものなるが故に、之で食ひ中るものなるが故に之を死に生きの緣切れの守護とした

のである、云ふもつまらぬ樣だが、かゝる出入の守護とか呼吸の作用とか、食物の引出とか生死の緣切とか云ふ內部の生理的作用によし、其當時適切なものたるにもせよ一々之等の下等動物を借り來て凡ての作用を司らせずとも、神自らが之を創造し之を支配し之を守護し、之を扶持すれば善ひ譯である、又其れでなければ神に全力がなひ、全機がなひ是では何のことはない、神は間に立てる仲買媒介人に使はれた樣なものとなる、殊に最後の生死の緣切れなどのことは實に宗教上否人生上の一大問題である、併るに彼は輕々に之を鰒の守護として之に任せるさては人間の大事なる生死と云ふものは、鰒の爲に左右

せらるゝものであるか、なんとなさけないものではありませぬか、進で彼が所謂人間創造の順序を辨じませう。

さて男女の別は、以上の鰻、鰈、黒蛇、鰒、是等のものを引き集めて人魚へ鯱鉾を入れ、之に國常立命の心を入れ込んで男の人を造り、更に同じく是等の物を集めて白蛇へ龜を入れ、之に面足之命の心を入れ込で女の人を造り、此の如くにして大和國山邊郡の元莊屋敷村の中山ミキの家の甘露臺の地場を神體の中央として北枕に九億九萬九千九百九十九人の人數を三日三夜に宿し込んだとの說明丸で寄せの怪談を聞く樣な有樣、之れが人間創造の順序とは驚ひたものではありませぬか、九億九萬九千九百九

十九人とか、三日三夜とかは何から割出したものやらさつぱりわからぬが、多分天の九星の理にでも依たものと見へます、其配當の工合は多分左の表の理に依たものであろふと思ふ、覺へ易きが爲に左の通り圖表をします諸君なんと其說明の馬鹿らしくはありませぬか、到底眞面目では聞て居られませぬ。



圖表の如くに國常立命は、一頭一尾の大蛇、面足命は十二頭三尾三劍の大蛇、此二は卽日月の二神にて天地本元の神である國狹槌命は、辰巳の方の龜、月讀命は、戌亥の方の鯱、雲讀命は、東の方の鰻、惶根命は、未申の方の鰈、帝釋天命は丑寅の方の鰒、大戸邊命は西の方の黑蛇、伊弉諾命は、北の方の人魚、伊弉冊命は、南の方の白蛇、である、約る處月日の二神卽國常立命と面足命とも、伊弉諾命の種と伊弉冊命の苗代とを造りて、月讀命、國狹槌尊、相入て男女の性を分ち雲讀命、惶根命、帝釋天尊、大戸邊命の各作用を材料とし之に鰌を以て靈魂を入れ、こゝに人間を創造したものである、而して此十神を合して十柱の神と云ひ、其內日月の

二神は天地の元神にして其他八神は我々肉體の基本である、是の十柱神を總稱して天理王命と云ふ、我々は之の天理王命に向て災病排除、福利增進の願をせねばならぬとすると、してみれば十柱神は皆悉く皆禽獸虫魚の劣等動物である、說き去りて段段天理教の淺劣野蠻の化の皮が顯れる、小學校に一二年も通つたものなら、うんと云ひてよもや承知はなりますまい、而して彼は此を以て天理天法なれば人間の計ひを以てする學問や理屈ではわからぬ、之を信じて之に從へば、一列濟して甘露臺と、淺間しや日々已れが膳の上に付て口腹に葬る魚介や、石を投て動かして見たり棒の先でじらして見たりする虫けらに頭

を下げて、萬物の靈長たる堂々たる人間の先祖として崇め、神も佛も何の物かは、親も家も何のものかは、跡は野となれ山となれ、夢中となりて家産を蕩盡し、甘露の臺の番人に、黄金の山を築かせるとは、實に浩歎長太息に堪へぬ事である、世若し五六十年前の昔ならばいざ知らず、明治聖代の今日、文運日に開け然も戰勝の光榮を海外万國に荷ふ名譽ある敷島男子の其中に其心内の兵略は斯の如き幼稚のものがありたなら、折角武器の上に顯したる威名を、むざ〳〵精神の戰の上で失敗を取らねばならぬ樣になろふ、何んと諸君歎かはしき事ではありませぬか。以上は彼が云ふまゝに任せて、それをそれと許した上に

論じたのであるが、更に立入て彼が所謂、十柱の神其物の神體撿べに取掛ろふと思ふ、と云ふものは外でもない神典に歴然と乘でいる立派なる神樣に相違なければ其必要はないが、彼の說く所は餘程可笑しく日本の神代の神樣に合はない、此れは他に駁邪をした人々も多く云ている事であるが、順序として一應述べ樣と思ふ。

全體日本の神代の系統は、最初に國常立尊がありた、次に國狹槌尊、次に豐斟渟尊とありて、此三神は獨化したる純男の神である、其次に泥土煎尊（男）、沙土煎尊（女）、があり、其次に大戸之道尊（男）、大苫遊尊（女）、があり、其次に面足尊（男）、惶根尊（女）、があり、其次に位して伊弉諾尊（男）、伊弉冊尊（女）、があり

ました、此の如く此の八神は、男女偶生にして四代ありました、それで其前の獨化純男の三神を合して神世七代と云ふのである、其前に天之御中主神、高御産巣日神、神産巣日神、宇麻志阿斯訶備比古遲神、天之常立尊の五柱神がある、是は神世七代の前にして、別天神と云ふのである、古事記でも、神皇正統記でも國史略でも、其他如何なる書籍に依るも此の通りである、然るに天理教の説くところは此の神の順序を顚倒し、初に置くものを後にし、後に置くべきを先にし、混雜乱錯、本末を顚倒して居る、其上に神の配列を間違へ、偶生の神を獨化の神の如くして居る、其他にも未だ種々の間違へだらけであるが、細いことは姑くさ

し置て帝釋天尊或は大食天尊、及び雲讀命の両神を十柱の神の中に入れたのは、如何なる譯であるか雲讀命だの大食天命だのは、今迄更に聞かなひ名、如何なる神典古籍にもそんな名は一つもなひなんのためにこんな、ところの國の馬の骨だかわからなひ神を引ぱつて來て十柱の神の中に入れたのやら、又此等の神は凡て白蛇や人魚や鰒や鰈なと云に、そんなことは何れの書物にもない更に其譯がわからぬ、而して其十柱の神の神躰を一々説明するに至つては實に抱腹絶倒、腹の皮をより臍の宿替を爲すことで、彼の秘密にして居る書物にはあるも、餘り馬鹿々々しく取るに足らぬことであり、且つ其大要は前にも

説明しましたから、今は略します、要するに前の圖表の如く十柱の神の一々の神體を虫魚の類として、其の神名の依て來るところを説明したるものであります、此の外東西南北と云ふ事、此世と云ふ事、夫婦と云ふ事、人間と云ふ事、日月と云ふ事、五輪五躰と云ふ事等の所由なとが實に何ともかとも形容の出來ぬ、文字によつて書かれてありますが、是等は敢て必要の條件でもなければ、今は別に陳べませぬ。

さて天理教は以上述へました如くに此世を觀じ、又人の成立を觀しました、これが即ち天理教の世界觀である、かういふ世界のなかにかういふ順序成り立ちで、人間が出

來たと云ふことは前の説明で明であろふ、そこで彼は進んで斯の如き成り立ちで出來た上の人間に就ては如何なる考を持て居ろう、六ケ敷云はゞ彼の人生觀は如何であろふか、少しく之を辨しましよう。

彼れは曰く人間には心得違がある、是の心得違がある故に、神意に契はさるものである、其の心得違とは何であるか即ち「欲い」「惜い」「可愛」「憎い」「高慢」「怨み」「腹立ち」の八である、此の八慾情を「八ッの埃」又は「八塵」と云ふのであると彼等が神前に於て祝詞を唱へ榊被を誦し神を奉信するは即ち此の八慾情の八塵を拂て神意に契はんが爲である、夫れ故に此の八つの埃を拂ひ捨てざれば、神の助けは

無ひものとする是も又信者より外に見せぬ神の古記等の秘密の書には片言雜りの文章にて說明してあるが、つまり其要旨は斯の如くである、第一に「欲い」と云ふは、身分不相應、分限外れの欲望を起し、其れに應ずる働きをせずに、ぬれ手で粟のつかみ取りと云ふ工合に、欲が募るを云ひ、第二に「惜ひ」とは獨り已の安を偷んで骨惜みを爲し、人にのみ働かせ、又は與ふ可きものを與へず、返す可きものを返さず、凡て筋道の違たを云ひ、第三に「可愛」とは、人と我との隔を爲し、已れの身、已れの親、已れの子、已れの親屬、乃至已れの道具表式に至る迄、已れのものゝみを愛み、大切がりて人に構はぬを云ひ、第四に「憎ひ」とは、同じく自他の

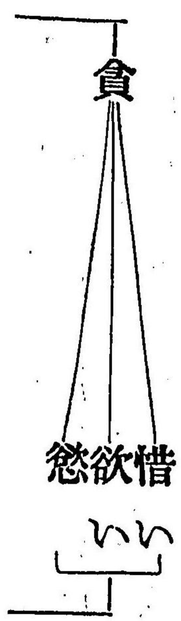
區別を甚しく立て、他人、及び他人に附屬して居るものを惡み嫉みて之を倒さんと計るを云ひ、第五に「慾」とは、足ることを知らず、其上にも其上にもと慾を募りて人を苦しめ、人を欺まし、已の欲を滿さんとするを云ひ、第六に「高慢」とは我が、我が、と云ふ我が根本となり我はいらい我は悧潑だ、我は才子だ、我は學者だ、我なればこそ遣つてのけたと云ふ我の心を云ひ、第七に「怨み」とは他人の爲したる事を怨み恨で、あの奴は我に向てかういふ事を爲した、あの女は我に對してかういふ事を言つた、依て我は其返讎をせねばならぬと云ふ樣に、人の言行を含恨するを云ひ、第八に「腹立ち」とは人の爲した事に怨みを含み、分別なしに

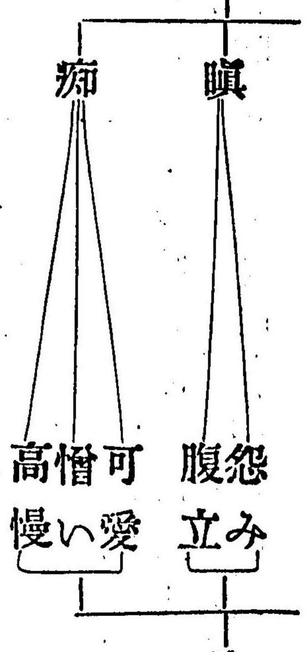
腹を立てるものにして之は前の七塵が基本になりて起るのであると云ひ其故に我々は能く考へて之の八塵を抑制せねばならぬと云ふのである、約る處是れが彼の八塵の說き明しであります。

世の多くの論者は直に頭から抗擊することに努めるものから、此の說明の如きに就ても一歩の寬假を與へず、抗擊の好材料として居る、しかし私はそう云ふことは好まぬ、寬す可き處は十分に寬し責む可き處は十分に責め、公平無私正々堂々と理論の上で論ずるが好かろうと思ふ從て此八塵の說明に就ても私は他の論者とは多少異見を異にする、私はかう云はんと思ふ、彼の所謂八塵即八つ

の埃は意の上に就て立てたるものにして我々が晝夜朝暮に事に接し物に觸るゝにつけ最も起り易い且つ最も普遍なる普通なる慾情を言ひ顯はしたのである「惜い」と云ひ「慾い」と云ひ「可愛」と云ひ「憎い」と云ひ「慾」と云ひ「高慢」と云ひ「怨み」と云ひ「腹立ち」と云ひ皆心意の上の作用である人間は之等の意の中の欲情煩惱から、遂に募り募りて身業を犯し口業を犯すに至る譯合にて、「惜い」「欲い」と云ふ慾情が勢を逞くして、段々募るときは遂に人の物を盜むと云ふ樣になり、或は「怨み」「腹立」が重りて解けぬ時は、遂に人を殺して思を晴すに至り「高慢」が增長すれば惡口の媒となり「慾」が增長すれば妄語を爲し、綺語をして人を欺くに

至り、「可愛」「憎い」の情念は遂に邪淫の風を釀すの弊を起すと云ふ樣に其れから其れへ段々慾念慾情が增長して不正の言行を爲すに至るのであります、其れだからつまり此の八塵は人間の根本欲で一切の惡念慾情は此に源を發して居るのである、佛教では塵勞八万四千と云ひ、人間の煩惱と云ふものは八万四千あるとしてあるが、其の內の所謂根本惑たる本家本元の根强い煩惱は貪瞋痴の三であると致しますが、丁度天理教の所謂八塵は之の、貪、瞋、痴の三惑に當るのである。





一寸此の通り圖表をしましたから諸君御覽なさい「惜い」「欲い」「慾」は皆な貪り心であります、即貪に當ります「怨み」「腹立」ちは對手に向て敵意を挾むのであるから、即瞋に當ります「可愛」「憎い」と別け隔だてをするのは即ち智惠の明かないの致すところ「高慢」は自分天狗になりて邪見を起す故此三つは痴に當ります、それで佛教で此の貪瞋痴の三を三毒の煩惱と云ひ、一切の煩惱は皆之から出ると

説く如く天理教にても、又諸ろの惡念情慾は此の八塵から起るものといたすのでありまして、之れが即ち天理教の人生觀であります。

以上は私の説明である、天理教の立派なる教師樣方は一人として斯の如き説明はなさりませぬ、入らぬ御世話と天理教から叱られて、骨折損のくたびれ儲けかも知りませぬが、かう説たなら八塵の説明は「退惡の一面のみの不完全なる倫理條目なれども、進善の教條を有せざる取るに足らざる立論なり」と云ふ樣な抗擊を加へずとも濟むことゝ存じます、先づ此の位に辨護しておかないと後の抗擊に面白味がなくて張合がない、只彼の説明の足らぬ

處を補つてやつたのです、決して天理教會から袖の下を貰つた譯では御座りません、こゝに一寸注意して置くことがある、私の如き素寒貧の裸書生が一夜の思付きでも此位の説明は出來ると云ふことはどうか諸君の頭の中に置て戴きたひのである。

そこで八塵の中「惜ひ」「欲い」の二つがあるには拘はらず更に「慾」と云ふものを別立したは重複であつて細かく云へば澤山あるが大別すれば慾は即ち「惜い」「欲い」の二つに分れる依て殊更に「慾」と云ふものを撥して七塵とする方が寧ろよかろうと考へる併し此等の事は今迄に他の論者も説明せられたから私は飛び離れた、しかも最も手强い

三十三珊の大砲丸を放たうと思ふ、扨て全體天理教は日本特有の宗教であつて日本の神教の改良なりと稱して居る然らば素とより神道の根本教理に據らねばならぬ諸君「惟神の大道を宣揚す」とは神道の第一義ではありませぬか、天理教は日本の神教でありたなら之の根本教義に依據せねばならぬ筈、佛教の組織が面白くなく今日の趨勢に後れて居るとて、新佛教を主唱する人は決して因果の理法を排斥いたしません、寧ろ今迄の説明の陳套に屬するを改めて組織的に其の眞理を顯彰致たします、因果の理法が崩れたら、新佛教どころではない、佛教と云ふ緣は、切れて仕舞ます、「惟神の大道を宣揚す」とは神道の根

本教理であります、之れによらず、之に從はぬものは決して神道ではありませぬ、天理教は此の根本原理を蹴倒して仕舞ひました、神は神聖なものであります、日本人民は其子孫であります、神の大道は本來法爾として淨聖なものであります、人間は其の子孫でありたなら、本來の性德は清淨なものでなければなりませぬ、併るにこゝに天理教は八塵を説て、人間の意には此の如き心得違ひがある此を拂ひ退けざれば神の御思召に叶はぬとするは前後矛盾の論法であります、人間の性德は清淨なるものであるとは其根本教義、而して人には八つの埃ありと云ふに至ては前後撞着して居りませぬか、本來の性德清淨

なるものに如何にして、八塵の汚れがあろふ筈はない、若し性徳は本來清淨であるけれど、此世の風に吹かれ縁に隨ふて、八塵の薫習するに至りたるなりと云はゞ、又論理に合はぬ、成る程世の風に吹かれて八つの埃がしみ付たなら付いたでよし、神の御救に對してその八つの埃を拂ひ退ける必要はない、自力修行で自分の力で甘露臺へ生るゝならば、素とよりしみ付いた八塵を拂ひ退けて本來の性徳に歸りて甘露臺へ行く可きである然れども既に、神の御救と云ふ神の御救と云へば既に他力である、神の御力で行くのである、されば即ち不斷煩惱得涅槃でなければならぬ、八塵は八塵を見へた其儘ながら、御救に預か

らねばならぬ道理、本來の性徳が清淨であり、そして八塵を拂ひ退くれば、即ち自力の働きで成就するので決して神の御救を容るゝの餘地がない、若し他力の神の御救があるならば、自ら八塵を拂ひ退けずとも、神がよい樣にして呉るゝ道理である、要するに八塵の説明は不合理である、若し天理教は敢て「惟神の大道」に依らずとせば其は即ち神教なりと許すことは出來ませぬ、平常の言ひ觸らしに背くことであります、併し此の八塵の説明は誠に天理教としては珍らしい、其の説の不論理なるにも拘はらず又私の辨護なき有の儘の説としても、他の説明に比して は大に眞面目である、先づ御多福の中の愛憐者と云ふ風

情であります。

以上天教教の教理を擧て、之を批評しましたが、天理教の教理と云ふものは、即ちこれ丈けであります、彼は此の世界觀によつて是の人生觀をなし、是に基て災病排除、福利增進、長命壽久、其他凡ての吉凶禍福の祈禱を爲すのでありますが、以上段々の駁論で、其の根本教理が全く土崩瓦解して仕舞ひましたし、かれば從て其教理によつて演繹し來りたる諸事凡ての事は別に述る必要もなく崩れて仕舞ふのは必定です、根を切られた木は到底生きて居ることは出來ぬ如くであります。

斯の如く淺薄劣等の宗教であるから、靈魂の滅不滅、世界

の終末、人間の終末、世界の概念、終局の目的地、即ち甘露臺の有樣、等宗教上の是非無くてはならぬ大問題大疑問に對して一も答へを與へぬ否此等の事に關しては考へが及ばないのである、誠に野蠻蒙昧の宗教にして到底我々の如き多少文明の空氣を呼吸して居るもの丶理性に訴へて判斷を下すことは出來ぬ、されば斯の如く舌を枯らし口を酢つぱくして辨駁するも、誠に大人氣なきことで實に馬鹿氣の至りであります、こんな話は吉原田甫で油揚二枚の爲にサンザン泥水を呑ませられて、善び心地になりて夜から夜中、田の中を經廻りて來た曉にてもなくては、本氣の沙汰で聽聞は出來ません。

第四章　天理教祭式を論ず

苟くも宗教たるものは何れの宗教にも祭式がある天理教も又其の祭式がなくてはならぬ、即彼の信徒たるものは必ず毎朝毎夕自分の家に祭りたる天理王命に向ひ、酒、洗米、をあげ、燈明を照らして拜禮稽首する、其の拜み方は始めに五遍柏手し、次に祝詞を唱へ禊拔を誦する、これは叮嚀なる式にて略拜には只五遍柏手をして「惡しきを攘て助け玉へ天理王命」と口唱しつゝ稽首するのである、毎月八日廿六日は祭日にして、此の両祭日には信徒必ず其の所屬の教會に集り、初に神前に跪て禮拜し終て教師は高座に上り説教を爲し、信徒は首を下げて之を謹聽する、終

れば各教師は揃て結界の内に入り込む、之と同時に柏子木、太鼓、横笛、摩金、胡弓、三味線を合奏し、之を相圖に各教師は立て「惡きを攘ふて助け玉へや天理王命」と唱へ、又「助け燥焦込む一列濟まして甘露臺」と大聲に高唱し、信徒一同は是に和して同じく唱へながら手踊を初める、丁度其の有樣は田舍の盆踊に似てしかもつと野卑なるものである、そうして教師或は重立ちたる信者の中には色々の假面を被りて踊り廻り、又十四五才より二十歳前後の女子は、緋紫色などの袴を着け新粧を凝らし一列に成りて手踊をすることもある、何故に斯くの如きことを爲すのであるか、彼等の云ふところを聞くに、往昔天照大神が天

の岩戸に隱れ玉ひし時、宇津女命を始め諸國の神々が御神樂を上げ歌舞を行ひ以て神意を慰め玉ひし故事に典據せるものであると云ふわけである、其の音曲と云ひ、其の手振と云ひ、男女入り乱れて踊り狂ふ樣實に婬隈野卑見るに堪へぬものがある、併し此れが堂々たる天理教の祭式で御座ります。

是れは彼の天理教で行ふて居るところの祭式の有りの儘、其儘を述べたのであります、是から少し斗り、此に依て駁邪の論鋒を向けねばなりませぬ、駁論をするに就き前の第三章には其の教理を駁し、次の第五章には其の教祖を駁す筈ですから、此の章では此の教理に依て組立てら

るゝところの天理教が、社會に對して風俗の上にも、衛生の上にも、道德の上にも、幾多の慘毒を流して、幾万の人民を過らしむる其の害毒を辨じやうと思ふ、蓋し此等の害毒たるや、固と教理に基くものとは云へ、主として其の淫隈なる其の野卑なる、其の不潔なる、祭式祭法から流れ出でたる弊で御座ります。

風俗の上に如何なる弊ある乎。私は此の間京都へ行きました、要用の間に余りの評判でありましたから、一夜友人と両人で祇園に都踊を見ました、十四五より十七八に亘る眉目美しき一群の舞子が、彈き鳴らす三味線、皷に合せて一樣に舞臺の上で踊る其樣を見て一種の感情が起

りた、一種の感情とは外でもない、此都踊は誰れも知て居る通り決して野卑ではない、決して婬隈ではない、寧ろ静かに雅かに見ている間は、恍として美の神に入るの心、地がして外の感覺は起らぬ、苟くも審美の情を有して居るものなら誰でもそうであろう、併し私はつく〴〵見終て腕を拱て腐都の婬樂と叫んだ、友人も又私を顧て亡國の兆と呼んだ、此の批評は余りに酷過るが、此の都踊が京都人種をして益柔弱に益奮發心を乏からしむるの一つの原因であると云ふことは事實である、之は決して過當の批評ではない、野卑でない、婬隈でない踊りにして既に此の通りである、天理教の祭式たる踊は何うである、都踊に

數等を下ることは一度京都の地を踏み、一度天理教會を覗いたものなら疑を容れぬことであろうかゝる野卑なる踊をしかも妙齡の男女入り交りて手に手を合はして踊り狂ふことのいかに有害であるかは直に各々の理性に訴へて判斷が下ることゝ思ふ、彼等は神前にてかゝる婬佚なる音樂舞曲を奏し、躍亂狂舞以て神の御機嫌を取り神樣に色事の媒妁をせよとの考であるか、實に馬鹿々々しく又慨かはしく何とも言句が出ぬのである、現に其初踊りの事を神道事務本局に向て認可を請ひしに、其の爲し振りの余りに見苦しき故同局は之を允さゞりしかば、彼は其後種々に方法を考へ倭樂と云ふ名稱を附して

更に之を懇願して遂に許されたのである、爾來幾度も地方廳より注意を受けたことがある、彼は明に男女婬樂の道を開て無慙無愧の男女の色仕事の媒介を爲すを方便として已の田を肥やすの目的算段である、若し彼れが眞に往古の古事を眞似て神を崇敬するの心に出でたならもつと温雅なる高尚なる律呂に合はして、もつと靜肅なる謹嚴なる手踊を爲す筈、三味線は音樂中最も婬情を喚起するものにして、凡て宴會遊興の席上に用ゐらるゝも、苟くも神聖の場所に用ゆべきものでない、然るにワサ〳〵之を持て來て、笙、横笛、等の高尚なる音樂に依らぬ所以のもの、蓋し彼等の野望を逞くせしむる爲である、天照

大神初め諸々の神々はさぞや、此有樣を高天原より見下して万斛の熱涙にむせんで居らるゝでありませう、彼は尙此にも止まらず「オヌクモリ」と云て深夜に男女打混じて教會所に集り、灯火を吹き消して雜魚寢を爲し神樣の御惠を蒙るとする實に甚だしきではないか、彼等は全る で教會所は遊女屋か地獄屋の積りで居るので、神聖の場所と云ふ樣な考は毛頭無い、實に風俗壞亂です繪草紙屋の下げ畵に湯上りの裸体美人の畵がぶら下つて居ても變な感情を起すのが人情です、よしや天理教の祭式が其れ等の惡しき目的を食ま、其の目的たるや神聖なるものとしてもかゝる婬佚なる振舞を爲しながら、どうして

が善良なる淨潔なる心に住して居られませう、其れも既に染つて仕舞たものの斗りなら尙恕すべし、幾多の善惡なき若き男女を誘引して、かゝる婬醜なる泥池の中に溺れしむるに至ては實に容るして置けぬわけである、若し西洋人が此の有樣を見たら何と批評しませう、風俗壞亂とは西鶴の小說本や、周延の艶繪斗りではない、彼等は一方から見れば寧ろ文學です、美術です、黑田淸綱氏の裸體美人が博覽會に出品されたとて、風俗壞亂とか、道德敗頽とか八ケ間敷世の中ではありませぬか、而して實に淸淨なる人心を過らしむる大陷穴に氣の付かぬとは何たる顚倒の事でありませう。

衛生の上に如何なる害ある乎。人間生れ出でゝ有機的機關を備へ、身體ありて生理的作用ある已上は自然の理として衛生の道を講ぜねばならぬ、病氣に成れば醫者に係り負傷をすれば藥を付けると云ふは當り前である、田を耕し畑を作りて米穀靑物を作るは、農夫の務である、物品を鬻で人々に便益を與ふるは商人の業である、繩墨をあて木材を集めて家を建てるは大工の仕事である、業に各分業あり、人に各職務あるは是れ社會の常則である、人の病氣を診察し、熱度の程度、呼吸の長短、脉胳の緩急を計り藥を與へ、術を施して治療の法を講ずるは是れ果して何者の取る職務であろうが、是卽醫士の將に取るべき正

當の事業である、醫士其人は之が爲に數年の間螢雪の苦を積て、桔梗勉勵其の法を得て政府の認可を得たものである、とにかく醫士は人間命の親であります、然るに天理教では何と說くか、病人あれば是れ卽神の御意に叶はざるものなりとて、患者の枕元にてドンドンチャンチャンチャン鐘太鼓を打て踊り散らし、又神水であるとて腐つた毒水を呑まし、痛處があれば無暗に之をつけ散らして、醫術などは是れ人間の智慧で出來たもの、天理は天理天法卽神の道であるゆへに一心に信仰して天理王命を賴めば平癒間違ひなし、癒へざるものは是れ未だ信仰の足らざるなりと云ひ、是の故に決して醫者等に依るべからずとし

て之を排斥する、又御息紙として身體に痛處のあるものには之を與へて貼らしめる、是は甕の中に鰌や鰻を入れ其儘土中に埋め置くこと五六ヶ月、全く腐敗せし比を見計て其の甕を堀出し、其の腐りたる水を半紙に塗り付けて之を八片に切りて教會近傍の紙屋に密かに預け置き、病人をして之を購ひ來らしめ、教師は之を神前に持出して其紙を恭しく両手にて捧げ、息を三度吹きかけて之を患者に與へ患部に貼らしめ御利益のあるものなりと稱して居る、精神作用と云ふものは爭はれぬもので精神で平癒せりと思ふときは一旦は平癒する所謂氣病と云て、已の精神にあれこれと心配して余計に病氣を重らせること

とのあるは世間多くの例のあることである、幻術中に被術者に筆をつかませて、之は燒ケ火箸だと云ふときは、被術者は驚て熱く感じ、實際燒ケ火箸を攫んだ氣に成りて居る、而して不思議なことには術が解けた後にも、其の筆を持た部分の點には、火腫れが出來て立派な燒跡に成ると云ふは屢實檢したるところの事實である、其故に天理教の患者に對してすることも患者の迷信の精神作用から平癒するもあろう、或は又煩る輕症にて時機來りて全癒することもあろう、こんなことは決して神の御利益でもなければ靈驗でもない、併るに幻術は人身の衛生上非常の、大害がある、今もかくの如くの精神作用から一旦は

平癒しても、身体には非常に害があるのである非常なる不衛生不養生である、之が爲に大に人身の健康を欠き、又大に精神の活動を損じることである、しかも其の一旦平癒すると云ふのは極輕い病の時にのみ僅に應用さるゝのみ、若し重病にして枕も上らぬと云ふ有樣、或は不潔から傳播する傳染病に罹りた時なそに、一盃の神水、一片の御息紙の爲に肝心の醫者にも見せず哀れ果敢なくも未だある命をあつたら捨てゝ葉末の露と消へ失せさせると云ふは誠につまらぬことである、たとひ耆婆扁鵲の名療にも及ばぬは人壽であり、いくら名醫にかゝりても、いくら藥は呑んでも死ぬときは死ぬ、併しワザ〳〵毒水

を呑んでバナルスを腹の中に植付け自ら求めて地獄の鬼と成るは入らぬ話、そんな入らぬ命があるなら、たんとは入らぬが二つ三つ貰ひ受けてかけがひに物置にでも積で置きたいものである、又日本の習慣として婦女子は懐胎すれば必ず腹帶をすることである、又懐胎後は必ず毒忌みをする、此等は余程教育上にも關係のあることで生子の身体性質の幾分は全く母親懐胎中の行狀に依るものである、之は實に大切なる事柄である併るに天理教信者は神の御惠にてかゝる腹帶毒忌などをせずとも安産が出來ると云て之を爲さしめず教會より御供九粒を産婦に授け、産前、臨産、産後に三粒づゝを呑ましめ、之にて

落産、難産の憂なしと云ふ、折角古代の良習を打破して産婦をして不養生の傾を生ぜしめ、結局難産せしむると云ふは實に言語道斷の次第でありまず、なぜかゝることをするのか、つまり金を取り上げる工夫より外はありませぬ、醫師とか湯藥とか、腹帶とか云ふものに費ゆる金員を以て信仰を天理王命に寄せしめ金を取上げるの算段でありまず、是等は其惡弊惡習の三四の例を擧げた斗りである細く調べたら中々こんなことではない、蓋し一部を以て全班を推すべしである、實に天理教の前では醫者も法謝も形無しであります。

道德は宗教の妻である

徳義の上に如何なる害ある乎。

徳義は教法の弟である、兩者此くの如く密着の關係を有して居るものにて、宗教と云ふ中には如何なる種類の宗教でも恐くは徳義と云ふことを含まぬものはない、宗教家は必ず道徳者でなければならぬ筈ぢや、天理教は苟且にも宗教である、彼は完全に道徳を保ち居るか、彼の八塵の説明は即彼教の道徳である、併しこゝでは天理教に於ける道徳の原理を調べるのではない、之は教理を論ずる邊で辨じた通り、今は其れより演繹し來れるところの災病排除福利増進等の事、及祭式祭要等の事が、果して道徳と云ふ道を履で居るか居らぬかを檢べようと思ふ、抑男女七歳にして席を同ふせずとは支那の聖人の教である、

之は今日の時勢に適して居らぬとしたところで、神聖無垢なる神前に於て唐八甚句に合はした様な野卑な節に合はして、男女混淆して淫らなる手踊を爲すことは果して道徳として許すことが出來やうか、夜中男女枕を並べて燈火を吹き消してオヌクモリを爲すことが果して道徳なるものであろうか、枕の上らぬ大病人に醫者を辭らして臭氣鼻を衝く腐れ水を呑ましめることが抑徳義に叶ふて居るか、私かに紙屋に於て腐れ泥鰌の水をつけた紙を購はしめて息を吹きかけて不思議がらしめるのは徳義と命名すべきものであるか天理教内の御人はとも かくも普通の常識を有して居る人なら、よも承知は出來

ますまい、とても天理教は道德の上に建立せられたる教ではない、社會には苟くも道德の制裁がある、之は法律の網の目に漏れた魚を捕へる法律です、天理教の今日の有樣は道德どころではない、一つ間違ふと法律の荒網さへ飛越さんとする狀態です、警視廳の訓令さへ出でたる今日の有樣です、道德などゝは素より彼等の見るところではない、若し彼等にして懺と云ひ愧と云ふ外に恥ち內に恥ちる一點廉恥の心がありたならとても出來る仕事ではない、廉恥のない卽破廉恥、無懺愧は取りも直さず不道德不德義の證據であります、苟くも恥を知る大和男兒の共に伍するを快とせぬところであります。

以上祭式の形式の上から見て、風俗上、衛生上より聊か批評致しました、風俗上衛生上の有害は取りも直さず、德義のない徵であります、表に風俗の壞亂を甘んじるは裏に德義の精華が無い故であります、身に衛生の妨害を爲るのは心に道德の火が消えた故であります、要するに天理教の祭式卽外面の形式教會制度は風俗の上にも衛生の上にも將た道德の上にも何れの方面より見ても取るに足らぬ否有害無益の社會を攪亂する道具で御座ります

第五章 天理教々祖を論ず

如何なる宗教でも一宗を開くには必ず立教の祖師がある、天理教もまた此を說く、彼のミキが自ら書ける立教の

筋書として秘藏せる「神最初の由來」と云ふ書に詳しく之を說明してある今是の書と他に傳はる書物とを參照して少しく之れを述べん、其の初め大和國山邊郡元莊屋敷村平民農中山善兵衛の妻ミキと云ふ者がありた、ミキは同郡三味田村前川某の娘にして、十三歳の時善兵衛に嫁し、三人の子を設けた、然るに此人生れ付佛心を有し、慈善の心深く、其の出產する每に、已の乳多きに付、隣家の乳不足なる者に乳を呑ませるを常とした、ミキが三十二歳の時に隣家の某も又三人の兒を設けた、然るに某は至て貧困にして且つ母乳に乏しきを以て、其の乳兒照之丞に預けて養育を賴んだ、ミキ大に之を愛し、實子にもをさ〳〵

怠ることなかりしが、照之丞不圖天然痘に罹り、十一日目より黑痘瘡と成り、容顏に黑色の痘瘡を生じ、醫者に掛けて聞くに、此は到底助かること覺束なしと云はれしかばミキ大に驚き、我預り中を死なしては何共申譯なしと思ひ、夫にも知らせずして一心に氏神に祈り、其の外八百萬神を呼出し、預子平癒の祈願を籠め、若し願ひ通りに其の壽命を下さらば、其の代りに我子三人の中、掛子一人殘し下さらば、跡二人は差上申と云ふ願を掛け、其他奈良の二月堂の觀音堂、裡田の大師、武藏村の大師の三ヶ所へ、三年三ヶ月の月參の願を立て、一心不亂に祈りせしかば、遂に其の預り子の照之丞は無難にて全快した、其後代りとし

て差出たる實子は一度一人迎ひ取りに來り、又其の魂再び宿りて産み出し、二度に迎へ取られたとの事である、是ぞ即ミキ立教の道筋なる第一の奇跡として傳ふるところであります。

次にミキ四十歳の時ミキの長男善右衛門が農業をなして居りしに、俄かに足痛せし故、直に醫師にかゝりて十分の養生をなせども治らず、大に困難して居る折柄近郷長瀧村に山伏市平なるものがありた、之を召て護摩を焚き寄加持をしたれば、一度治癒せしが、又日を經て痛み出せし故、又前の如くに市平を賴て寄加持をした、此の如くすること、數十度、其の度毎に一々幣持人を賴みしが、ミキ四

十一歳に成りた時の十月廿四日の寄加持には初てミキ自ら幣持人となり夢中に成りて幣を振る中にあらゆる神が御下りに成て仰せられけらく我は天の大將軍なり此度はミキの身體を社に貰ひ受けの爲天降れりと、親族相集りて、是れ必定狐狸の爲業ならんと貰ひ受の事を辭りたれども、中々聞入れず、ミキの體を貰ひて三千世界に助けを教へる神の體とするのである、然らずんば此の家斷絶に至らしむとの事故詮方なく承知しければ、同廿四日の夜半九ッ時に俄かにミキの家宅地のみ震動して數時間に渡りた、其内ミキの寢間の天井にて大きなる音するかと思ふ間に、ミキの體は重くなり、心に早や覺つかな

くなりた、只耳にかすかに聞ゆるには我は國常立之命であると云ふかと思へば亦體が重くなりた其内に我は面足之命である、此より此世を初めし十柱の神々が代り代りに御下りになるとて御上りになりた其れより二三年の間に段々と十柱の神の御下りになりて次第にミキの體に乘り移られた事である、是れ實にミキが第二の奇跡として傳ふるところであります。

元來宗教には自然教と天啓教の別がある、自然教と云ふのは天地自然の理法に隨順して發達し來りたる宗教を云ひ、天啓教と云ふのは、即直覺教にして勝者の啓示指示に依りて直ちに感得するの宗教を云ふ、宗教の數多しと

雖大別すれば此の二を出でない、之の二に依て教祖を見ることに自から重輕の別がある、自然教に至ては之を見ること輕く、天啓教に至ては之を見ること重くある、天理教は果して何れであるか、勿論天啓教である、ミキが夢中の間に神が乘り移りて、神の啓示に依て立教し、神の指導に依りて開宗したのであるから、無論天啓教である、かく天啓と云ふことは明に解りた上で、然らば如何なる因緣を以て神が僻村の一賤婦に依りて教を傳へられたのであるか之を研究するは面白きことである、同じく「神最初の由來」の中には斯くの如き意味を以て説明してある、ミキの體に十柱の神が乘り移りた後には屢月日の二神よ

り御嘶になるには、我々兩人の神は泥海中より顯れて世界人間を造りた、是より天下らんと天より下界を見渡すに、此の屋敷は人間を造りて宿仕込たる屋敷の因緣がある故にミキの魂は取りも直さず人間宿仕込の元の親と爲る、伊諾冊命の魂を授け置いた、其れ故にミキの天性博愛恭仁、我子二人迄も差上て、其上我が命迄も捨てゝ人の子を助けると云ふ心ばへがある、皆是れ神の爲業なりとの事である、是れで啓示の因緣が御わかりに成りたと思ふ、即中山ミキの屋敷は人間宿仕込の跡であるがゆへにミキの魂は神の魂である、其れ故にミキは天性恭儉博愛一視同仁毫も神德に背反することがない、かゝる因緣を

以て多くの人の中から、ミキを以て特に此の教音を傳へたと云ふわけであります。

元來中山ミキの性行は如何なるものなりしか、彼が自ら書き殘せるものや、信者の言ひ傳へる口碑にては已れに都合の善いこと斗り言て居て事實の眞相が解りませぬ私は現に天理教本部なる即大和國山邊郡元莊屋敷村なる中山ミキの住宅の近傍に代々住んで居る或る老翁を知て居ります、私は或る時質朴素野なる此の老翁に就てミキの性情を聞きましたが、彼れ天理教の言ふところは大に違て居る、老翁は永く其の近傍に居て親しく其の實況を見、ミキの生涯を知て居る人であります、此人の云

ふことを聞くに、ミキは性淫奔放逸、常に夫善兵衛を蔑にし、密夫三昧に日を送り、近傍の後家娘等の姪奔者と相與して、内産墮胎を内職とし、又自らも密夫の種を宿して之を墮胎せしむること數を知らぬ、彼れミキが屢奈良警察署或は櫟木分署へ引致せられ、繫獄の身となりしが、即其の證據である、又彼は浪人安藤源左衛門と私通して其の子を預り育つと云ふ名目にて、其の淫欲を逞ふして居りた、彼の照之丞なる痘瘡子は即此の源左衛門の子である、而して彼は諸方に祈願して己の子と身代として彼を助けたと吹聽すれども、其の實照之丞は已れの介抱の行屆かざるが爲に死したれば申譯なしと思ひ、一策を案

じて近郷に痘瘡患者のみ相集へる一村あるを幸ひ一夜忍で照之丞と同じ年ばへの痘瘡子の癒へたるものを金にて買ひ、照之丞が痘瘡にて面相變りて死したるを幸ひ之を養て照之丞なりと稱し來りたのである、彼は實に此くの如きの惡人である、彼は又若き折より一疋の野狐を拾て之を養ひ、之を愛することを宛かも已の子の如くありた、然るに此の野狐成長するに及で通力を得、人心を釣るの術を感じたるを善き事に思ひ、他人の吉凶禍福を占ひ病氣全快を祈禱し、盲昧愚暗の人を籠絡して金錢を貪るを常とした、之れが即天理教の起りであると、老翁熱心面に顯はれて淳々と說き明された、是の如きは獨り此の老

翁の言ふ所にあらざるが如く永く其の近傍に住居して居るものゝ多くが認めある處である、果して然らば彼れたとひ言を巧にし表を飾りて、寄跡の不思議のと吹立つるも化の皮の顯われた話、詮のないことでありますなんと諸君驚いたものではありませぬか。

併し此は一問題です、とにかく立教の筋書として立てあるところのものを、二三の人の言を採用して一概に此は僞話であるとするのは宜しくない、私は未だそこまで研究が行き届きませぬから、今は假りに彼の所謂二種の寄跡が確かに有りたものとして少しく論ぜやうと思ふ。

さて、この二種の寄跡は實に中山ミキと云ふ一賤婦が天

理教を唱へて其の開祖となる大因緣でありますれば、素より彼等の仲間にては餘程大切に思て居るのでありますが、先づ第一の寄跡を考ふるに、中山ミキなるもの、人間がわかる、表面から見ると彼は確かに愛他主義でありた

即西洋近代にてバトラー、リード等の人々が主唱せし愛他主義の而かも極端に走りた考である、愛他主義とは言ふ迄もなく、苟くも人たる已上は本來道德の本心即良心を有する良心を有すれば己を捨てゝ人を利し、我を顧みずして他を愛するは是れ人の人たる道にして、禽獸と相擇ぶ所以であると云ふのであるが、ミキの所謂第一寄跡は此の愛他主義の極端に走りたのである、愛他主義の嘉

すべき主義か嘉すべからざる主義かは道義學上の一大問題、こゝに云ふの必要は無いが、とにかく常識に訴へて已を後にして人を愛すると云ふは、善き行には違いない而して熟ら退て考ふるに此の場合に於げるミキの行蹟はどうである、已の子と人の子、一人と二人、死と云ふ人生の最大問題、かゝる大切なる場合にも、ミキは屑く二人の實子を差出して一人の稚き預り子の命乞を爲した常識からすれば到底考へ得られない、普通の人ならとても出來ぬ、尚其上に預り子は痘瘡である、病氣である、痘瘡で遂に致命するは昔より隨分其例に乏しくない、病氣の爲に死に至るのは其人の運命で致方がない、しかるにミキは

之の事情をも又排した、隨分君の爲、親の爲、或は恩人敬者の爲に、卽盡すべき人に向て盡くすのは人間の義務で此等の關係ある人に向ては、事に依り已の子を捨てゝも人の子を救ひたいと祈願するが至當であるが、今はそうでない、却て已が恩を施せる生れたばかりの預り子に向て、幾多の事情を排却してかゝる献身的のことをするは先づ普通の人には見ぬ話、是は愛他主義の本義にも合はぬ事で、段々詮じつむれば、ミキは愛他主義を利用して世間の好評を博せんが爲他人より善き評判を受けんが爲中山ミキは普通の人間でない、慈善心深く神佛の心を有して居ると云ふ風聞を得んが爲に、人間普通の倫條を踏

破り、恩愛の絆を斷ち切て、かゝる思ひ切つた事を爲したのである、言を換て云へば、己の利の爲に己の子を擲たのである、此の如く見來るときは彼は立派なる利己主義であります、ホップス、マンデビル氏等の流れを汲んで而かも拙劣卑野の行を爲したる我利我利盲者であります、つまり彼れは預り子の照之丞を救はんと夢中に成て騒ぎたのも、己の爲にせん考であります、然れば此の第一寄跡は立派にミキなるものは人を突き倒しても己の欲を全ふせんとする心を推し包んで、表に愛他主義を裝ひ人の爲には己の子迄も犧牲に供すると云ふ風を見せ、我利自利を張る極端なる筋の惡い利己主義の惡婆であると云

ふことも判然致します。

次に第二の寄跡を案ずるに、ミキは確かに一種の强き精神病者でありた、彼は生れ付の神經質でありたところに一種の精神術をかけられ、深く其れにはまりて遂に强き精神病者となりた、即四十一歳のとき長男善右衛門の爲に祈禱の磐持人となりた、そのとき正しく精神術をかけられたのである、天の大將軍の御下りなりと稱して種々の事を云ひたの、家宅が震動したの、躰が重くなりたの、國常立命、面足命が御下りになりたのと云ふのは、取りも直さずそが爲し業である、近い例を引けば一昨年あたり非常に流行した幻術と云ふものは、只精神の作用に過ぎな

いが、其の被術者は施術者の意ふが如くに口を開き身振を爲し、どうでも自由になることである、又數年前に行はれた狐狗狸の如きも之と同じことで、此等の作用は凡て豫期意向と云て、已の意でかくなるべし、かうなるべしと豫め意に期して居る意思の傾向が第一の主因なのである、ミキも平素神經質にして且つ寄加持をすれば神の御下りありて御利益があると云ふことを十分に豫期意向して居たのである、此等から考へて見れば、決して此等寄跡と稱するもの決して寄跡でない、誰にでも出來る芝居で御望なら誰方でも入らつしやい、私でも術をかけて上げます、然るに此の精神術も施術者と被術者とに依り解

けるのと解けぬのとあります、解くれば恍として夢の醒めたるが如く、術中の事は凡て夢の中の樣な心持がしてぼんやり識覺する、解けぬものは一生の間施術者に精神を奪われて馬鹿の如く、恍惚自失して居る樣な人間となる、狐憑なぞは卽此類に屬します、狐狸等は一種の怪力を有して居るものであるから、人に向て此の術を施すことがないとも云へぬ、案ずるにミキは狐狸の爲にこの精神術を應用されたのである、然れば彼は疑もなき狐憑である、氣狂である、精神病者である、此に依て是を觀るに第二の寄跡は精神病者の施術者の操糸にあや取られて顯はしたる言行であると云ふことは明であります。

ミキのミキたる既に此の如くであります、神の特にミキに啓示したる所以の如きも、又精神病者の一夜のよまひ言に過ぎない、二種の寄跡の如き、決して不思議のことはない、少しく慧眼の人は直ぐ化の皮を剝いて仕舞ひます

ミキの第一寄跡の時は未だ精神病にかゝらぬ前で、我利を募り名利を貪るに餘念なかりし時でありますが、然るに第二の寄跡に至ては其の時精神病にかゝりての病氣の上の現象でありまず、それでミキは時過て、病氣が癒りて病中に感得したことをつゞりて天理教を組織したか、或はミキは一生病氣が癒らざりしが、後に人ありてミキの病中の言行に依て教理を組立てたるか、とにかく天理教

の教理はミキの病中に源を發して居るのであります、精神病者の言行は果して一宗を組織するに價するものなるや否やは姑く別問題に屬します、只宗教の起源としては、かゝる荒誕なことも敢て無碍に排斥することは出來まいと私は考へます。

さて斯く研究して見れば二種の寄跡もさつぱりつまらぬ、天理教組織の大因緣もイヤハヤ狐憑のヨマヒ言と成り下て仕舞ひました、立教の因緣既に然り、教祖の人物既に然り、教理、教式、淺劣野蠻なのは即其の處です、かゝる人物を崇めて教祖と云ひ開祖と云ひ、下へも置かず持て囃すとは何たる腐甲斐ないことでありませう。

第六章　日本國民と天理教

單に宗教と云へば其の範圍廣くして、古今を問はず東西を論ぜず、其の要素を備へ、其の本性を持して居るものなら如何なるものでも、即宗教です、併し是は只宗教の原始時代で宗教が未だ孵らん前の話、未だ國家と云ふ文字を挾まぬ前の事、苟くも宗教が國家と關係を有し、限りたる一國に應用されたる場合には素より國家の制裁がある其故に宗教としては十分に本性要素を備へて居るものとしても、其の國の國法に合はぬものから、其の國の宗教として信ずることは出來ぬ、然らば日本國家が宗教に對するの制裁はどうであるか、之を一應研究して天理教は

果して之の國法に合ふか、合はぬかを調べるが順序である我日本國家は去る明治四年に三條の教憲を發布して宗教の憲法を定められた、三條の教憲とは何であるか。

第一　敬神愛國の旨を躰す可き事。

第二　天理人道を明かにすべき事。

第三　皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむ可き事。

第一は即國體の本義を規定せしもの第二は即國家の道義を規定せしもの第三は即國是の大本を規定せしものである、是の國體の本義と國家の道義と、國是の大本と此の三要素を備へたものが即日本の宗教であつて、たとひ宗教としての教理法義は、如何に高尚幽深でも如何に幽玄

微妙でも、此の三要素を備へぬものなら決して日本の宗教と云ふことは出來ぬ、日本國民としての宗教は即是の三條件を具へねばなりません、之を又去る廿三年發布の大日本帝國憲法の明文にも明記してあります、即憲法第廿八條に曰く。

日本臣民は安寧秩序を妨げず及臣民たるの義務に背かざる限に於て、信教の自由を有す。

別に説明を要せずして之の文言の意味は御解りになりましょう、わかり易く云へば之れが二段となる。

(一)　安寧秩序を妨げざる限に於て

(二)　臣民たるの義務に背かざる限に於て

之の二條件を備へたる限りに於て、日本臣民たるものは信教の自由があるのであります、之はつまり前の三條の教憲を約めたるものであり趣意に於ては少しも違はない。

之れで是等の規定教憲は明治維新後に始めて發明したのではない、成る程成文律として文言に顯はして規定したのは明治已來であるが、其の淵源するところを考ふるに實に過去二千年來の歴史は之が不文の法律として實行されて居たのであります、儒教は支那の宗教である、支那は君暴なれば臣討て之に代ると云ふ革命の國風であるから、毀は周に亡され、秦は漢の爲めに討たれると云ふ如くにして、皇統一系と云ふ樣なことはない、之れだから

其の國に起りたる儒教も又自ら此の風を帶て居る、然るに我日本帝國は万世一系皇統連綿として絶ゆることなく、實に宇内無比の國體でありまする、故に其昔儒教が入りて幾多の文明を輸入致しましたが、其の革命の風ある日本の國體に合はぬ處は遂に行われない、否多少其の傾を生じたかも知れぬが、之は藤原に代る平、平に代る源、源に代る北條、北條に代る足利、足利に代る織田、織田に代る豐臣、豐臣に代る德川と云ふやうに、其の風は所謂征夷大將軍に止りて決して、万乘の皇室には寸毫の累も及さなかつた、之れ即支那の儒教が日本風に同化したのであります、佛教もまた然り、其の初印度に起り、支那に渡りて印

度的支那的でありしものが、日本に渡來しては其の風を脫して日本固有の日本的佛教となり、遂に他國には思ひも寄らぬ王法爲本とか、立正安國とか、鎭護國家とか云ふ樣な聲を聞く樣になりました、からなれば最早や支那の儒教ではない印度の佛教ではない、殊に渡來以來千有餘年國風に同化して風紀を維持し人心を支配し來りたるもの、即純然たる日本の儒教である、日本の佛教である、基督教も其初は國體違背とか、非國家的とか、種々抗擊の鎗玉に擧げられたが、彼等も段々考へて遂に日本化するに務めて來ました、併し是は儒教や佛教とは少しく性質を異にして居るものではあり、渡來以來日未だ淺くもあり

到底儒教佛教が我國の人心を支配して居る樣な勢力は得られずにありまず、併しとにかく段々と日本化して行くのは事實です、今迄の有樣が既に此の如き工合で、こは即安寧秩序を妨げざると云ふ條件と、臣民たるの義務に背かざると云ふ條件とに依て居る結果でありまず、然らば日本の宗教たるものは、理論の上から云ふも歷史の上から考ふるも、之の憲法の明文、三條の教憲に依らねばならぬことであります。

次に神道と云ふものは如何なるものである、日本特有の宗教で日本以外には通用せぬ、皇祖皇宗を祀りて其の教を奉じ惟神の大道を宣揚して忠孝一致の大道を履むと

云ふのである、こは固と一種の日本の國體論であるから素より同化不同化の論は入らぬ、中に入れる物が定まりてから造りたる器故、國體に合ふ合はぬの論は不要である、只私はかくの如きものは文明の宗教と名くべきものでなく、寧ろ日本の國體論と見る方が宜からうと考へる併し之れは別問題です。

さて天理教は如何であるか、天理教は神道である、神道は日本固有の宗教である、(神道と宗教と見る世の說に從て)然らば天理教は國体に合するや否やと云ふ如き論を擔ぎ出すは、野暮の樣ではあるけれど、成る程天理教にして實際改新の神道ならば疑を容るゝことはないが、彼は假面の神道である、神道の

皮をかぶる淫隈不敬の邪道である、之を取調べる必要は十分あることゝ思ふ。

委しく言ふ迄もない前章に云た通り、天理教では十柱の神を立てゝ、其の神體を一々虫や魚に配し、國常立命は一頭一尾の大蛇、面足命は十二頭三尾三劔の大蛇、國狹槌命は龜、月讀命は鯱、雲讀命は鰻、惶根命は鰈、帝釋天命は鰻、大戸邊命は黑蛇、伊諾弉命は人魚、伊諾冊命は白蛇、と禽獸虫魚の劣等動物を引來て、十柱神の神體として恬として甘じて居る、之れが即前章陳べたる彼の教の根本教理である之の十柱神に依て、御救を求め、其の冥助に依て幾多の幸福を享受するものとする、即之の教義を根本として成り

立ちたる天理教である、實に皇祖皇宗を辱かしめて禽獸虫魚となし、畏くも万乘の帝迄が之の虫介の御子孫とするに至ては、實に敬神愛國の國體の本義を破り、又天理人道を踏み間違へたる、國家の道義に悖りたる淫祠邪教である、如此、上皇室を輕賤し奉り、下万民の心を蕩亂し、朝旨に背反するがゆへに、即國是の大本に背て居るものである、實に彼等は世道人心を破る背倫悖德の大國賊と云わねばならぬのでありません。

如此三條の教憲に一々背て居ることは明かでありますから判斷しても、同じことゝ、かゝる國之を憲法の明文の上から判斷して、同じことゝ、かゝる國体に悖りて皇祖皇宗を辱しめ奉るが如きものは、どう考

へても臣民たるの義務に背かずとは云へぬ、立派に臣民たるの義務に背ゐて居るのである、又神水御供と稱して腐敗の水、或は米粒のかけ抔を與へて、醫藥を廢せしめ、或は男女混淆して婬猥野卑の風俗を爲し、以て無垢の少年少女を過らしむる、は、確かに安寧秩序を妨げて居るのである、然らば天理教は立派に國法國律を破りたる邪道邪教であることは明です、要するに以上は教理の優劣から論斷致したのではない、國憲の定むところに於て天理教は慥に日本國と相容れぬのであります、日本國民たるものは決して此の天理教を信ずることの出來ない筈であります。

第七章　佛基両教と天理教

古往今來、東西両洋、宗教の數は實に多い、然れども其の内重なる大いなる宗教は何であるか、世界の三大宗教と云ふは佛教と基督教と回々教であります、然るに此の三大宗教は皆亞細亞に起りました、佛教は印度に起りて東して支那に入り、其れより日本に傳り、基督教は猶太に起りて西して歐米諸國に渡り、近年日本に入り來りました、獨り亞刺比亞に起りたる回々教は、宿緣淺くして未だ日本の地に入らない、又三大宗教の中でも回々教は佛基両教に比しては勢力も少くない、其の教理から考ふるも、甚だ淺薄である、故に三大宗教と云ても世界の舞臺の上に於

て佛教と基督教との盛なるは是卽自然の理である、然るに其の両教が日本の舞臺の上で相見たから戰はずには いられない、之でこそ佛教と基督教と両者相隔てることは遠きものにあらずと云ふ論も出で、基督教の進歩派と佛教の改革派とは漸く近き來りて一堂に會すると云ふ樣な現象を顯さんとするに至りたれ、維新以後泰西文物の輸入し共に基督教の我國社會に入りて後數十年の爭は中々強い、佛教者も固陋なれは基督教者い。頑迷互に相讓りて靜かに研究すると云ふことを知らず、只我意を募りて無理でも非でも已の說を推し徹せば之れで善いと云ふ有樣併るに佛教は千有餘年の昔に傳はりて我國風に

同化して居る宗教であり、基督教は傳來以後日尙淺いから、自然の勢として抗擊の論鋒は多く佛教者から向けられ是に應ずる受身の楯は多く基督教者から立てられた其の戰爭の火花は諸々方々の原中で散らされたが、約るところは二つの戰役に過ぎない、第一は國家的非國家的の論戰で第二は眞理非眞理の論鬪である、前者は多く普通一般の社會に行われた問題で、後者は多く學者社會の爭でありた、何れの國にて、何れの宗教でも、初め或る宗教が或る國に入る其初には必ず二三の衝突はある、衝突に衝突を重ねるところで、初て、其國の國風と同化せねばならぬと云ふ必要を感じる、そこで此度は教理は枉けずと

も、布教の方法を一變して其の國に同化する樣にするのは宗教發達の順序である、然るに其の間に佛教者は已の教域を蠶食せられまいと思ふて頑固な抗擊を試み、基督教者もこゝを先途と必死になりて防戰する、其の結果として基督教者の其の宗教の多少の改良を施さねば、日本國には適せぬと云ふことを發見し、佛教者も又一大敵手を得て兇の緒を締める用心をする樣になりたから、何れにしても宗教の發達には違いないが其の代り兩者夢中になりて桃み合ひ、佛者は基督教者を潰すのが我唯一の務と心得、基督教者は佛者を潰すせば我が立脚地を得らるゝと考へ、顧て人を教へ世を導き、安心立命人間精神の

響導をすると云ふことを忘却したるの傾向を生じ、互に牙城を出でて鹿を中原に爭て居る、然るに智識高尚なる血氣壯んの人は其れでよいが、愚暗無智なる老人小兒に至ては眞理討究の軍には出られず、安心立命の食物はなし、止むなく精神の養ひをしてくるゝ援兵の來るを渴望しつゝ、路頭に迷ふて居る、こゝに於て妖教天理、こゝで我が一隊が正しく旗上げの時なりと、密かに裏手の間道より廻りて、佛耶兩城の出軍跡の空虛を覗ひ、路頭に憐を乞ふ老人小供に飴ん棒をあてがひ、頭を撫で背をさすりて遂に已の兵となし、首尾能く一方に城を構へた、佛耶兩教者の戰も畧落着がついて大將株はそろ〳〵陣を引上て

本城に返へり來れば、豈計らんや、天理教の一軍は老人小兒の一隊を集めて我が領域を蠶食しつゝあらんとは。天理教の一軍は佛教や基督教の如く、正々堂々表の方から陣太鼓を鳴らし、宰配を振つて進んで來るのではない裏の方からこそ〳〵と人目を忍び暗討である其れ故に教理は如何國體を輕賤す、風紀を紊亂す、道德に背反すと云て議論をしかけたところで、向では其れ程に感ぜぬかも知れぬ、誠に張合抜のした話です、天理教軍の軍律規肅と云ふものは此の如きものである、併し其の勢は中々馬鹿には出來ぬ、一寸考へると左樣な卑近野蠻な宗教は開明の今日傳播しそふもないものであるが、そうはいかぬ

ヤッパリ衛生の行屆いた今日でも、虎列刺病は流行るから。

其の勢の強いことは、丁度惡い血を吸ふたシラミの樣なものである、天理教と云ふシラミは惡い血を吸ふたシラミが、人の身體に附着するが如く速に人の心の内に附着します、其の惡い血を吸ふたシラミが人身に附着すると肉體が腐敗して先頭非常に流行した再歸熱を起す如く天理教のシラミが人心の中に入ると、直に精神が腐敗して家産を蕩盡します、然れどもシラミは不潔なところにはなり不潔なところに傳はるものにて淨潔なところにはない、從て淨潔なところには再歸熱の媒介とされる樣な憂

はない、(過般再歸熱の我國に流行せしとき醫師大に究しシラミの確かに其の傳染を媒介するものなることを云へり)天理教のシラミも又人心の不潔なところより不潔なるところに傳染し、決して高尚清潔な立派な心を持て居る人には傳はらない、從て家産を蕩盡する憂もない、かゝる媒介があるから、再歸熱の蔓延が早くして且夥多しいので、天理教のシラミをひねりつぶし盡くさねば、人心腐敗の度を止むることは出來ませぬ。

流行病と云ふものは一時流行するもので、いつでもあるものではない、虎列刺病も夏季です、痘瘡はシカも五六年に一度位です、腸室扶斯も氣候の工合で流行る、黑死病も今は消へてありません、再歸熱も昨今は姿をかくしまし

た、一時はパット流行てパット消ゆるのが流行病の性質です、併し其れには養生が肝心です、衛生が必要です不潔にして不養生とすれば決していつまでも其の勢を減じません、恐ろしいものです、身體の病氣より精神の病毒は中々強くて衰へません、再歸熱は此節撥つたが、天理教は益盛んです、再歸熱の豫防注意は非常に善く行屆いたから早く病毒が撲滅したが、天理教の精神の病毒の用心藥は行屆きませぬから益今日に盛になります、誠に歎かはしきことであります、身體の衛生を司るものは內外の醫士であります、精神の衛生係たる宗教家、即佛教者、基督教者及神道者の人々が努めて衛生の道を講じ、心の中の大

掃除を爲し、椽の下を掃き、石灰を捲き、體を淨めて、以て此の心内の蠻毒の流行を防ぐのが、卽其の務であろうと思ひます。

第八章　天理教大斷案

（一）天理教は宗教の本性定義に照して、確かに宗教たるの價を有す、但其の宗教は野蠻時代の宗教思想なり。

（二）天理教の世界觀は哲理に照して、不合理なり、又歷史に徵して背戻せり、其の人生觀は根本教義に慓反せり、卽其の教理は歷史に背き哲理に合はず。

（三）天理教は風俗の上にも、衛生の上にも、將た德義の上にも有害有毒なり、卽其の祭式は社會上に害を及ずことと

多し。

（四）天理教祖中山ミキ開宗の大因緣たる第一寄跡は偏固なる利己主義に過ぎず、第二寄跡は精神病者の囈語に過ぎず、卽開宗の教祖は常識以下の人間なり。

（五）天理教は三條の教憲憲法の明文に背く、我邦に容るべからざるの宗教なり。

（六）天理教は佛基兩教の油斷に乘じて教を弘めり、天理教の今日の勢あらしむるもの、佛基兩教者の責免るべからず。

公平評論　**天理教大斷案**　終

跋

猿子を抱て青嶂の後へに歸り、鳥、花を啣むて碧岩の前に落つ、由來佛法因緣を說く、淫祠天理教の今日に盛むなる亦た此の因緣圓熟せるの故にあらずや、人は那の點に於ても眞理を要求す、若し其れ因緣の圓熟ならむか五百萬の蒼生何か故に此の妄僻邪義に唱仰し此の淫祠妖教に隨喜せむや、沙中尙ほ且つ黃金を藏す、妄僻邪義の裡、淫祠妖教の中、豈に些毫の眞理を含まざらむや、此の眞理と此の因緣以て今日の隆盛を致す、宜しく其の源を探りて之を批し之を評すべし、徒らに末流を趁うて嘲罵これ事とするは佛子の任務にあらざるなり。

想ふに天理教は十柱の神を説て世界觀を明かし、八塵を示して人生觀を明かし、祈禱禁厭舞踏の法を以て絶對に接融せしむ、其の教不稽に其の事は荒唐なりと雖、亦漫に冷笑を以て罵却するべきにあらず、況んや神佛耶の三教を混和せるの實教なるをや、又た況んや日本人民十分の一か信仰の主點たるをや、之を論じ之れを難す、須らく非常の鄭重を以てせざるべからず、鈌腸安藤兄は吾と志を全うするの士なり、夙に佛典を究め深く東西の哲理を考へ、靜かに天理の宗旨を察し、彼の漫罵冷笑の徒に傲はず正々堂々これを過去の經歴に討ぬ、これを現時の狀態に照し、万斤の鉄槌、三尺の秋水、鋭利の筆力淫祠を碎破し妖

教を寸斷し了る、蓋し近來の決筆なり、晩夏雷雨激しきの夜、讀過一番、爽氣人を襲ふ、乃ち大白を滿引し高吟して曰く三千劍客今何在獨許莊周致太平と筆を呵して跋に代ふ。

三界一門樓にて

咄堂居士　識

明治廿九年十月廿五日　印刷
同　年十月廿九日　發行

著作者　東京市淺草區松葉町三十九番戸　安藤正純

編輯兼發行者　京都市下京區中珠數屋町通烏丸東入廿八隣町廿二番戸　西村七兵衛

印刷者　京都市東六條　法藏館

發行所

賣捌所
京都　西村九郎右衛門
同　顯道書院
同　藤井佐兵衛
同　興教書院
同　永田長左衛門
同　澤田友五郎
京都　山内正次郎
東京　哲學書院
同　伊藤清九郎
同　鴻盟社
大阪　松村九兵衛
同　金尾種次郎
國前　日新館書店
名古屋　海野小次郎
美濃　吉田松太郎
同　岡安慶介
岐阜　郁文堂書店
越後　樋口書舗

●天理教破邪新著廣告

羽根田文明居士著

●天理王辨妄

全一冊　正價金拾錢　郵稅金貳錢

本書は佛教幻燈演説に有名なる文明居士か各地巡歴の際該教會蔓延の地に臨み種々の危險を胥して彼か秘密的内部を探り以て邪妄の邪妄たる實證を發見し比較的に邪正の通路を指示し最も精密に利害得失を論し盡して毫も餘地を與へす一擊の下に數百人の教徒をして其邪妄を翻し眞理の軍門に降服せしめたるは居士か實驗に徴して明著なり破邪顯正に從事せらるゝ諸君は必ず一本を購求じ以て彼等を打破するの鐵棒としたまへ

神宮少教正松木時彦著

●心鏡一名天理狂退治

全一冊　正價金拾錢　郵稅金貳錢

天理教會の愚俗を籠絡して世道人心を害すること誠に深くして且つ廣し世の志士仁人夙に其弊を憂へて駁論の書を著はして膺懲を試みる者あるも其肉を抉し骨を刺し妖魔を殲して遺憾なき者未だ本書の如きはあらざるなり本書は博覽雄辨に名ある神宮教少教正松木時彦氏の演説筆記にして同中教正春樹氏の題辭吉岡沛雨氏の題歌亦た大に光彩を添ふ破邪顯正に志すの士は請ふ必ず一讀あれ

瀬味祐成著

●天理教會摧魔窟

全一冊　正價金拾錢　郵稅金二錢

●天理教ひねりつぶし　●天理教問答
●天理教ふきちらし　●天理教樸滅

各一冊元價六厘　郵稅八冊迄貳錢　施本には至極適當なり

書名	著者	冊數	正價	郵稅
智惠眼	萬機普益	全一冊	廿九錢	六錢
四學問答	皇佛漢洋	全一冊	拾錢	貳錢
人道	實踐躬行	全一冊	拾貳錢	貳錢
佛耶血戰	覺念居士	全一冊	六錢	貳錢
葛原道心	法味因緣	全一冊	六錢	貳錢
中將姫之傳	半休居士	全一冊	拾錢	貳錢
普通佛教	小松原著	全一冊	拾五錢	四錢
佛門立志史論	飯沼亮俊	全一冊	拾錢	貳錢
駁邪演說筆記	覺念居士	全一冊	拾錢	貳錢
大家佛教演說集	諸高僧說	全一冊	拾五錢	貳錢
演說筆記	能辨學會	全一冊	拾錢	貳錢
佛教唱歌集	岩井一水	全一冊	拾錢	貳錢

發行所

京都市東六條

法藏館

特 18
270

天理教大断案

国立国会図書館

014448-000-1

特18-270

天理教大断案（公平評論）

安藤　正純（鉄腸）／著

M29

ABB-0826